





## 著者紹介

宍戸游子 (ししど ゆうこ)

本名・宍戸昌子。1933年、旧満州大連生まれ。  
学習院女子教養学園卒業。

日活アクション映画全盛期の'62年に、俳優の  
宍戸錠氏と結婚。40才からの転機をはかって  
俳人の東早苗に師事。現在はエッセイストと  
して、新聞、女性誌などに数多く執筆。

最近のパフォーマンスの構成、演出も手がけ  
ている。テニス、旅行が大好きで、料理じよ  
うず。車の運転は免許取得以来、無事故を誇る。  
著書に『主婦だってルネサンス』(主婦の友社)、  
『なんとおっしゃるうさぎさん』(講談社)があ  
る。

'77年、俳人協会会員となる。三児の母。

塗り残したエスパース

定価1200円

1987年10月8日 第1刷発行

著者 宍戸游子 <検印省略>

発行者 石川晴彦

発行所 株式会社 主婦の友社

東京都千代田区神田駿河台2-9 郵便番号101

振替 東京2-87527番

電話 (編集)03-294-1121 (販売)03-294-1133

印刷所 凸版印刷株式会社

© Yūko Shishido 1987 Printed in Japan

ISBN4-07-926460-7

もし落丁、乱丁、その他不良の品がありましたら、おとりかえいたします。  
お近くの書店か、本社にお申しいでください。

目次 塗り残したエスパー

檜葉茶色の秋

3

薄墨色の冬

25

陽炎の春

61

瑠璃色の夏

155

# 檜葉茶色の秋

*L'automne brune*

「間もなく名古屋です」

車内アナウンスが流れると、隣の席の男は大きな伸びをしてから出口へ向かった。

「ああ、やっと旅行に出た気持ちになれたわ」

大島史希は中腰になり、それから初めてリクライニングを倒してみる。それにしても、車中での日本男性のマナーはひどすぎる。東京駅から彼女と隣り合わせた中年の太った男性などは、発車前からあたりまえのように靴を脱いで、組んだ片方の足の靴下の裏を、これまた平然と伸ばしてきた。そのうえ幅をとる体型をいっそう広げてスポーツ新聞に見入り、ときおりカバのようなあくびをして、吐く息が前の夜の酒気を残している。

「耐えられない——」

史希は声に出して、そう言いたかった。車掌が検札に来たら席を替えてもらおうと、発車のベルが鳴ると同時に出入り口のほうを窺っていたが、土曜の朝のグリーン車はほとんど満席に近く、この分だとむずかしそうだった。史希は半ばあきらめて、できるだけ体を窓側のほうに向け、隣の席との間隔を保つような姿勢のままだった。列車が動き出すと、間もなく周りの男たちは居眠りを始めたり、早速、日本酒のワンカップを傾けるグループもいる。

史希はふと夫の横顔を思い浮かべた。徹は今ごろ何をしているだろう。会議だろうか、それとも来客と打ち合わせ中だろうか。いや、今日は土曜日だから、特別出勤とか言っていたけど、何をするのだろうか。もし徹だったら、朝の新幹線の中でどういうポーズでいるだろうか。たぶんコーヒを飲みながら、「タイム」でも読み始めるだろう。史希は窓際に押しやられたまま、くすんだ京浜の街々をぼんやりと眺め、そこに夫の姿を映してみた。

こうやって一人で新幹線に乗るのは何年ぶりだろうか。思い出そうと目を閉じたが、そのとき、隣の男性の新聞をたむ腕が彼女の肩に触れる。

「ああ、いやだわ」と史希は思わず顔をしかめた。こうシートが窮屈では、せっかくの一人旅の味わりなどまるでなかった。

新横浜を過ぎたころ、車掌がやっと検札に来たのだが、隣の男性が切符を探し出すのに手間どってしまった、史希はどうとう席を替えてもらうことを言いそびれてしまった。それでも小田原を過ぎたあたりから、見え隠れする海の景色にいくらか気分が休まってきた。

秋の海は寒流が一気に勢いを増したせいか、それともプランクトンが夏よりふえたためか、濁っている。幾つかのトンネルを過ぎると、今度はいびきの往復がいやおうなしに迫ってきて、この切符を手配してくれた父の親切が、かえって恨めしくさえ思われるのだった。

京都市行きは本来なら一昨日のはずだった。あいにく四日ほど前から長男の哲が風邪で熱を出していたので、この旅行をあきらめていた。それに実家の母と姉とは予定どおりに出発してい



たから、自分が行かなくても招待してくれた京都の伯母にはそれほど迷惑はかからないだろうとも思ったが、そう思いながらも彼女にはいくらかの心残りがあった。

この旅行は京都住まいの、母の姉である路子伯母が秋のお彼岸の中日に毎年行う月見の宴への誘いで、それはもとより、そのあと京の旬のお料理を味わうという食べ歩きを、史希はひそかに楽しみにしていた。その日はまた、伯父の命日でもあったが、どちらかというところ、年々、お月見の宴のほうが主になっていた。この京都行きは史希がもの心ついたところからの彼女の実家、西野家での年中行事となっており、とりわけ女たちはこの旅のために袷を新調するというならわしさであった。

それに今年には伯母の還暦の祝いも兼ねていた。祝いの席には俳号を早苗という伯母の、伝統俳句を継承する同人たち、また『花氷』という俳句誌の主宰者でもある伯母のお弟子たちが、一堂に集まって句会を催すことになっている。

季節を彩るような、そんな伯母の生き方が史希は好きだった。東京育ちの伯母は京都に嫁ぎ、夫を亡くしたあとにも姑に仕えて銀閣寺のすぐそばにある家を守り、京の町で背筋をしゃんと伸ばして生きている。そんな伯母の姿に、史希は大人の女の美しさを見ていたのだった。

その伯母も一昨年、姑を亡くして一人住まいの身。でも彼女は移りゆく京の四季、花、時鳥、月、紅葉、雪を賞でながら、少しづつ優雅に年を重ねていた。

自立した女性。伯母にはこのような固い形容は似合わないが、史希にとって彼女は眩しい存

在であり、なかなかまねのできない女の生き方でもある。

史希は久しぶりに伯母に会いたかった。だが、今年は行けない。そう思うと彼女は熱を出した哲を少々恨みたくもなったほどだ。

「どうしても来られないの？ 哲君の様子は？」

昨日、京都にいる母から電話があったときには、哲の熱は下がっていた。それに食欲も出てきて、もうおとなしく寝てはいない。といって病み上がりの小さな子をおいてまで、旅に出る気にはなれなかった。

「残念だわ。お父さまがせっかく伯母さまのお祝いにつて、嵐山の『吉兆』を予約してくださいのに」

母の陽気な声が受話器から弾むように流れてくる。史希には母の明るさが、今はうっとうしく思われた。母、治子の趣味は美味探訪で、とりわけこの秋の旅を楽しみにしていた。史希と姉の美希はもっぱら母のお相伴をする役目だったが、史希はここ四年ほど、母のお供をしていない。彼女は年子で出産した二人の男の子の世話の明け暮れで、このところいつも母と姉の、おみやげ話のご馳走にあずかるだけだった。

もっとも昨年の秋には、珍しく休みがとれた夫と、車で京都へ初めての家族旅行をした。伯母に子供たちを見せたいと、親子四人出かけたものの、それはもう大変な騒ぎになって、例によって先着の母たちにもさんざんな思いをさせてしまった。母が予約した光悦寺の精進料理

も、静けさの中で味わう風雅な趣もどこへやら、哲と弟の拓のむずかる中では老舗の味を楽しむどころではなかった。それに夫の徹は、家庭的な父親の役割を外で披露するのがどうも好きでないようで、あまり子供たちのめんどうをみてくれなかった。家庭では子供たちと、時間の許す限り、絵を描いたり、プラモデルを組み立ててくれる父親なのに――。

史希は意外な夫の一面を初めて見たような気がした。それにしても、今年はどうして『吉兆』のような格式の高い懐石の料亭に母が行く気になったのだろう。母は常々、京の「一見さんお断り」という、氣どった店は嫌いだと言っていたのに。どうやらたびたび東京の吉兆に招待されたことのある父が、そのつど、吉兆の包丁の至芸を母に話していたので、それで彼女も試してみる気になったのだろうか。

「茶料亭なら、瓢亭を利休にたとえれば、吉兆は光悦だ」

父はそう言っていた。

母と姉とが予定どおり京都へ発った翌日に、実家のお手伝いの佐藤さんから電話があった。父からの伝言で、哲の風邪は心配ないこと、何かあったら父の病院の小児科医とすぐ連絡がとれるようにしてあること、そして父は週末ゴルフへ出かけるので、佐藤さんを史希の家へ寄りますから、京都へ行くように、ということだった。

「私もお坊っちゃまがたのお顔を見たいので、お伺いしたいんですよ」

母が嫁ぐ前から西野家に仕える佐藤さんは、いつまでもお嬢さままでいる母の治子に代わっ

て、哲や拓の祖母の役を引き受けたがっていた。史希はその夜、このことを徹に話した。

「父が京都へ行っておいでと言うの」

「いいよ。久しぶりにゆっくりしてきたら？ それに銀閣寺の伯母さんのお祝いだろう」

珍しく夕食に間に合った徹が、食事のあとですっかり元気になった哲を相手にレゴを組み立てながら、温かい口調で言った。

総合病院の院長でもあり、また内科医としても高名な父の許可もあって、史希はいくらか気持ちもちが動いたが、もう京都市行きことはすっかりあきらめていたので、父の好意もかえってわずらわしいと思った。

翌朝、目覚めると同時に玄関のチャイムが鳴った。誰だろう、こんな早い時間にと扉を開けると、そこに実家のお手伝いが立っている。

「あら、佐藤さんだったの」

「おはようございます。これ、お父さまからのお預かり物です」

小柄な老女は、大事そうに持っていた白い封筒を差し出した。

「新幹線の切符だわ」

「はい、さようでございます。九時とかで、間に合わないと大変ですから」

佐藤さんはそう言うのと、勝手知ったる他人の家とばかり、さっさとキッチンへ入っていくと、きりっと割烹着を着て朝食の準備を始めた。

「あ、いらっしやい」

化粧室から徹がパジャマ姿のまま出てきて、佐藤さんの早い訪れにとまどっていたが、それでも妻の実家からの使いの意味をすぐ察していた。

「史希、子供たちなら大丈夫だよ。行っておいで。今日は早く帰れるし、明日は家で調べものがあるから出かけない」

徹は服に着替えながら、はつきりしない史希の態度を姿見に映しながら言った。

「ええ、でも……」

「一人旅も悪くないよ」

徹はそう言うことから、史希の背に軽く手をおくと、急いでダイニングへ行った。そこには佐藤さんがすっかり朝食の用意をしていて、テーブルには徹の好物であるオムレツもある。

「さあ、史希も早く支度をしなさい」

「いいかしら、行っても……」

史希は徹と朝食をとりながら、すでに京都への思いを馳せていた。哲も拓も起きてきて、佐藤さんを見つけてはしゃいでいる。

「抱っこして」

「どうしてババちゃまいるの？」

どうやら行く気にはなったものの、何だかこの温かさを残したまま、一人、旅に出るのは惜

しいような気もする。だが、せっかくの夫のやさしい思いやりを素直に受けることのほうがいいと彼女は思った。

「さあ、出かけるか。史希も気をつけて行っておいで」

徹はそう言うと、席を立った。

「パパ、バイバイ」

「うん。いい子でいなさいね」

いつもの朝より、ずっと父親らしい笑顔を見せながら徹は出かけた。

「さあ、お嬢さま、お急ぎになってください」

佐藤さんは、朝食のあと片づけをしながらせかした。史希は追い立てられるようにまず子供部屋に行き、むずかる哲に体温計を当て、その間に弟の拓を着替えさせる。そうしながらも彼女は何か胸が締めつけられるような緊張感があった。そういえば、結婚する前も史希はたった一人で旅に出たことがない。今日、たとえ母や姉がすでに京都に着いていても、彼女にとってそこへ行くまでの道程は、初めて経験する一人旅である。わくわくと同時に、まるで見知らぬ街へ行くような、そんな不安もあった。

哲の熱は平熱だった。用心して幼稚園は休ませることにして、毎朝一緒に通園する明子ちゃんのパパに欠席の電話をかけたあと、急いで留守中のメニューを幾つか書き上げて佐藤さんに渡した。それから子供たちの日課を説明する。主婦がいざ出かけるとなると、案外、こまごま

としたことが多いのにあらためて気づいたのだった。

いつまでも身支度をしない史希に、佐藤さんはダイニングを手際よく片づけながら言った。

「さあさあ、あとはおまかせください」

時間を気にしながらも、史希は子供たちを呼んだ。

「ママはこれから京都へ行ってきます」

「ボクも一緒に行きたい」

「タクも行きたい」

兄弟はあわてて母親の腕の中へ飛び込んで、お互いに史希を独占しようとする。

「でもね。今日はママ一人で行くの。おりこうにしててね」

「ウン。じゃあ、おみやげたくさんね」

「ボクもイッパイ」

兄の哲が聞きわけのいい返事をする、弟の拓もすぐに同調した。史希は二人を胸にぎゅっと抱きしめてから、佐藤さんのほうへ連れていった。

「佐藤さん、お願いします」

子供たちは、史希の手からすぐに佐藤さんの腕へ移り、まつわりついている。彼らはいつものより、甘い蜜が吸えるうれしさを体中であらわしながら、もう史希のほうを振り向かない。彼女の心にふと淋しさがよぎった。そんな史希に、佐藤さんが急ぐようにと目くばせする。

「あら、大変だわ。もうこんな時間」

彼女はあわててエルメスのポストンバッグに荷作りをする。母や姉のように旅の新しい装いは詰められなかったが、それでも秋にふさわしい色合いのブラウスと、お祝いの席に似つかわしい明るいジャケットをコーディネートしながら、束の間の季節の衣がえを楽しむのだった。

京都まであと一時間。史希はぼんやりと窓の外に目を向ける。しばらく関西のほうへは出かけていなかったのも、心なしか窓から見る風景が以前よりも混んで殺風景になったようだ。

しかし、こんなにゆったりとして外を眺めている時間を持てたのは本当に久しぶりだった。この解き放たれた時の中で、自分をとり巻いている拘束がかえってうれしくさえ思える。今、別れてきたばかりの夫や子供たちが無性に懐かしかった。

一日の大半を子供と過ごしている史希は、一人になる時間がときたまほしいと思うことがある。本を読んだり、とりとめもない空想をしたり……だが、実際に今、一人になってみると、思うのは家族のことばかりだった。とりわけ徹との距離が、時速二五〇キロの速さで引き離されていくのは、史希にいつそう夫への想いを募らせる。今、すぐにでも飛んで帰りたい。彼女は目を閉じて夫の映像をそこに映した。彼の愛情がゆったりと彼女を包むようだ。

太陽が光の矢となつて窓越しに飛んでいく。史希はいくらかほてった頬をそつと指先で押さえると、高くなつた秋の空をほほえみながら見送つた。空は薄い水色だった。



「お嬢はん、ええお天気どすなあ」

京都駅からタクシーに乗った史希に、運転手がバックミラー越しに声をかけてくる。

「そうですね」

そう答えながら、思わず史希は吹き出しそうになった。いきなり「お嬢はん」と呼ばれて、顔をぼっと赤らめている自分がおかしかったからだ。

「観光どすか、それとも嵐山でデートどすか」

「いいえ、どちらでも……」

史希はこれ以上、運転手との会話をつづけたくなかった。せっかく「はんなり」という京言葉の趣に浸ろうとしていたのに、「いつ、どこで、誰と」という質問にまともに答えていては、すぐに里心がつきそうだと。史希は聞こえぬふりのまま、京の街をまだ幼かったころに訪ねた日々を思い出しながら、少し感傷的に眺めるのだった。

渡月橋のたもとで車を降りた。そこから川の上流にある吉兆まで、少し歩きたいと思った。いきなり店の玄関までタクシーを乗りつけたら、あまりにも便利すぎて、家から家への空間が乗り物ですべて埋もれてしまう。